

# UIFA JAPON

## NEWSLETTER

### ■主な内容

- 第3回UIFA JAPON総会、記念講演会のお知らせ
- 第6回海外交流の会の報告
- 役員会の報告
- 特集 阪神大震災 その後の街の動き

### ■UIFA JAPON 第3回総会・記念講演会のお知らせ

来る6月11日(日)にUIFA JAPON第3回総会で開催される記念講演会について、その概要をお知らせします。

日時 平成7年6月11日(日) 13:00~17:00

会場 北の丸公園 科学技術館 第3会議室

プログラム 総会(13:30~14:00)、記念講演会(14:15~16:00)、懇親会(16:20~17:30)

記念講演会 <サンフランシスコにおける「アクセス」への取り組み>

講師 リチャード・スカッツ氏

: サンフランシスコ公共事業部門障害者アクセシビリティコーディネーター

1968年 サンフランシスコ私立大学卒

1978年 転落事故により脊椎損傷

1989年 連邦の「すべての人が楽しめる公園」

~現在 等障害者のアクセス指針作成等多数の

法案、建築規定作成に携わる。

コーディネーター 川辺 美彦氏: JUDA日米障害者協会会長

1953年 広島生まれ

1973年 スポーツ事故により頸椎損傷

1976年 国立呉工業高等専門学校卒(一級建築士)

1989年 渡米 自立生活運動、アクセス問題研究

1992年~NW及びJUDA講演シリーズ統括責任者

両氏は5月19日から6月11日まで日本におけるJUDA講演シリーズとして神戸市を皮切りに全国14都市で講演、その最終日が本会での講演です。多数ご参加下さい。

### ■第6回UIFA JAPON “海外交流の会”

「デジタルメディアの世界をさぐる」

日時 1995年3月18日(土) 13:00~15:30

講師 デジタルハリウッド(株) 社長 杉山知之氏

会場 同社ミーティングルーム 参加者28名(内会員15名)

第6回海外交流の会は杉山講師(’94Mビジョン国際映像祭産業映像部門作品「Mビジョン・フィルム・プラダ美術館」で最優秀賞受賞)によるデジタルメディアの発展動向等の講演。産業革命以来の大きな変化とされるこの技法は、これまでのコミュニケーション手段である文章、言葉、図面等をビジュアルに立体や動くもので表現、リアルタイムでアイデアを伝えると共に世界中からの情報を知り得ることも可能という。実例として「プラダ美術館」をリアルタイムで体験。この技法による映像は現段階では建築の感触、時間的余韻、周囲の雰囲気を与えるには至っていないが、伝統工芸やスポーツ選手の動き等時間の流れを分析する分野でその威力が発揮できる表現方法と思われた。

今迄になかったメディアが共通のコミュニケーション手段となった時、時代は大きく変わるといふ。私達は今からこの変化を受け入れる準備が必要なようだ。(小渡喜代子)

### ■役員会の報告

第14会役員会(’95年3月15日) 役員11名出席

東京女性財団事業(贈答品)報告書・第6回海外交流の会・第12回UIFA日本大会参加動向の報告、第3回総会での記念講演者・プログラムの内容検討。

第15会役員会(’95年4月10日) 役員9名出席

第3回総会へ向けて、会務・運営・本年度計画・94年度会計収支決算・記念講演・スケジュール・会場等の検討。第6回海外交流の会総括・日韓交流会収支・記録発送・助成金額の報告。

第16会役員会(’95年5月9日) 役員8名出席

第1回韓日交流の会(秋川)の韓国側の提案を受け、具体的内容を問合せの上検討予定。第3回総会に関し、総会議案書・記念講演・スケジュール・配給料を検討、枠組みと内容を決定。

「阪神大震災に被災して」

大きな地鳴り音と共に、激しい突き上げと横揺れがきた。家がギンギンと軋み、物のこわれる音がする。手探りで階下に降り、着の身着のまま外へ出る。空が白み始める。屋根瓦ずり落ち、外壁に大きなクラック数カ所。一応住めると判断。周囲を見ると、古い木造家屋が多く倒壊している。信じられない光景。みな青ざめ、震えている。



電気が通じたのを機に家に入る。呆然と立ちつくす。食器棚が調理台にかぶさるように倒れ、割れた食器やガラスの破片で足の踏み場もない。冷蔵庫は一回転してドアをふさぎ、電話、FAXはちぎれてとんでもないところに転がっている。書籍は床に散乱し、額や時計ははずれて無残に壊れ、ピアノは1m移動して倒れている。形あるものの虚しさを感じる。

翌18日早朝、水と食料が隣近所から届く。お互いの助け合い、励まし合いが生まれる。

地震5日目、大雨予報。屋根の養生をせねばならない。地元では調達できず、大阪の知人に応援を頼む。夜中の3時出発。水とビニールシートを荷台にいっぱい積んできてくれる。ありがたかった。近所に配る。

地震3週目、待ち望んだ水がくる。漏水。出入りの職人が来てくれたがかなり手間どる。2Fトイレから汚水が降る。排水管破損。1Fビショ濡れ。地震に強い給排水設備は不可欠と痛感。

あの地震から早3ヵ月余が過ぎる。この間、多くの方々に助けられ、心からのお見舞いや励ましを頂き、身に沁みて嬉しかった。つらい出来事ではあったが、このたびほど、人の心の温かさに勇気づけられたことはない。

今後は、地震の記憶と体験を生かし、安全で快適な住まいとはどういうものか、時間をかけて考えてゆきたいと思う。

西宮市 日高たか子建築設計室 日高たか子

「トップヘビー」

今回の地震の特徴の一つとして古い木造住宅の崩壊・損壊の多さが取り上げられている。瓦の生産地である淡路の住宅の無残に倒れた映像が連日報じられ、関西特有の屋根を重くした「トップヘビー」の構造が被害を大きくした原因であり、瓦屋根は危険であるという印象を多くの人々に与えた。工事用の青いシートで覆われた被災地の住宅は、補修補強工事が進むにつれ、次々と軽い工業化製品に置き換えられている。瓦は第一の落下危険物であり、葺き土と共にやっかいな廃棄物としか評価されていないようだ。過去の地震活動の記録によると、神戸市付近では約1500年程度の間大きな地震が起こっていないと思われる。被害の大きかった地域では唯一淡路島北部に1916年（大正5年）にマグニチュード6.1の地震が発生している。今回のような被害を生じた原因は、過去に大きな地震を経験していないということが考えられ、また、想定していた地震以上の大きなものであったことが考えられる。しかし、木造の被害の原因が「トップヘビー」の構造にあり、「瓦＝危険」であるという風潮には少々納得がいかない。震災直後応急危険度判定に出かけた住宅は、戦後間もなく建てられたであろう瓦葺き2階建ての建物であった。目立った被害もなく、近年になって増築した部分に被害が認められた程度である。また、増改築を繰り返した建物では、持主がいかに丁寧に手を入れながら暮らしているかが窺えた。壊滅的な被害を受けた木造だが、住み手の建物への愛着と造り手の建物への良識が、多くの倒壊家屋に見られる虫害・腐食を未然にくい止め建物を倒壊から守ることができたようだ。木造を支えてきた職人が少なくなった現在、維持・再建することがますます困難となり姿を消していくことだろう。一抹の寂しさを感じる毎日である。



兵庫県 巴建築設計事務所 武野朋子

## 「神戸のまちはさながら戦争が過ぎた後でした」

「震災の街神戸、ここ御影にも初夏の緑の風が頬を通り過ぎるようになり



ました。昨年巣をつくっていたツバメ、今年は姿が見えません。どこへ行ってしまったのか、ツバメも驚いたことでしょう。ピアノの件、お世話になりました。(中略)

卒業式と、6名の今は亡き子供たちのお別れ式に立派に役立ってくれました。ありがとうございました。(後略)」以上は、神戸市立御影小学校から長女へ届いた葉書からの引用です。「全壊した家の中から運び出したピアノを使ってくれる方はいてはりませんか」という申し出に、近所の幼稚園、小学校に電話をかけまくって、やっと長女が見つけた貴い手が、御影小学校だったのです。

私はこの3月に、15歳の長女を連れて神戸YWCAの支援活動に参加させていただき目的で神戸へ行ってきました。神戸YWCAでは震災直後から、行政の手の届きにくい被災者の、自立へ向けての支援を中心に、炊き出し、仮設浴場の運営、テントの補修など、いろいろな活動を行ってきました。震災前からの各種支援活動で培われたマンパワーに加えて、今回全国から集まってきた高校・大学生・社会人の力で、蔭の部分にも少しずつ光が当たってきています。震災後2ヵ月を経た街では、ライフラインの復旧もかなり進んでましたが、東西に一本につながる鉄道は無く、もちろん

「暮らし」というソフトの部分は、やっとこれから建て直しを始めようという状態でした。粗野な言動が見られる子どもたちの様子ひとつをとってみても、人々の心の痛みは図り知れません。全壊した家屋の中から、色々な品々を拾い出して思いでを話してくださった方々の顔が今でも目に浮かびます。神戸の復興は、これからが正念場だと思います。これからも、色々な形で支援を続けたいと思います。

神奈川県 自営 古村伸子

## 「蘇るまちをめざして、被災地を歩きながら」

4月25日、震災から99日目の神戸を訪ねた。墨田区女性センターの事業として企画したフォーラム<震災から3ヵ月!-蘇るまちをめざして、被災地を歩きながら考えたこと->の開催を2日後に控え、企画を推進してきた立場からも、自分の足で神戸を歩いた上で臨みたいと思ったためである。

傾いたオフィスビルや瓦礫の山によって平衡感覚を失ってしまうような地域、水色のビニールシートさえなければ「空地のおおいまちだな」という位で被災したことに気づかないで通り過ぎてしまいそうな地域、すっかり片づけられた広い焼け跡にポツポツ建ったプレファブ小屋で飲食店や酒屋が営業を始めた地域など、復興への動きもさまざまなまちを、霧雨の降る中、ほとんど休みなく歩き続けた一日となった。真野小の横の公園の小屋の中では真野のまちづくりに長年取り組んできた宮西さんと、西宮では被災したUIFA JAPONの日高理事にもお会いでき、かえってお世話になってしまったことがとにかくうれしかった。

27日、震災101日目のフォーラムの講師は3人。神戸に生まれ育ち、大きな被害を受けられた都市計画プランナーの水口俊典氏、震災5日後にリュック一杯の医薬品を背負い神戸入し、その後「サポート神戸」を設立、救援活動を続ける医師の堂園涼子氏、神戸の真野と同様、木造密集住宅地域である墨田区の京島でまちづくりに取り組みながら神戸を支援するプランナーの大熊喜昌氏である。震災当日から流れた時間が、フォーラムをしみじみしたものにした。気の遠くなるような作業にとりかかって、その行く先は全く見えてこない、とにかくやれるだけのことをやっという講師たちの気持ちが聴き手の心を打ったのだと思う。

2日前、霧雨の中で捜し求めた<蘇るまち>への手がかりはまだ見えない。あきらめずに、少しずつでもその手がかりを毎日の仕事の中に探したい。

東京都 生活構造研究所 松川淳子

「- 1995・阪神・淡路大震災から3ヶ月 -」

4月中旬神戸に入った。神戸駅前の  
パートは半身を破壊されたまま再開店。  
市役所の階段・トイレにはまだ被災者が沢  
山滞在し奥から議論の声が聞こえる。  
長田地区の学校は運動場がテント小屋で  
埋もれている。しかしそこに暮らす人々の表情は必ず  
しも悲壮感はなく、訪ねた私の緊張がとける思い。小  
学生の女の子が給水タリから水運びをボランティア、校庭で  
は着物姿の歌手が難波音頭を歌い、皆さん一緒に踊り  
まじょうと声かける。仮設のフロには「長田湯」と暖  
簾が掛り高年の男性がタリで汗を拭きながら出てきた。  
のどかささえ感じる。人間の強さを感じる。被災材が  
片づけられ広く見える街区内にコンクリートの建物がスルト  
状に焼け残り、すざましい火災を連想させ生々しい。  
小公園に立木が残るその先の7棟の住宅が焼け残って  
いる。公園と比較的大きい立木の効果が見える風景だ。

真野地区は、40haのうち0.6haの焼失に止まったと  
いう。他の地域の焼け野原からみると信じがたい出来  
事だが、事実である。昭和40年頃から住民参加でまち  
づくりを進めた所で、係わってきた延藤氏(鮎杖)の文  
章を引用すれば、(これからの賠償づくり-あとがき-)“参加のまち  
づくりは、日常的に蓄えられてきた人と人の豊さが非  
常時に大きな社会的力を発揮することを改めて明らか  
にした”という事を、焼け野原に立つと実感できる。

中井久夫(鮎杖)編「1995年1月神戸」(おぼろ)は、  
阪神大震災下の精神科医達の活動記録で、記録の多く  
は学ぶべきことである。花一輪が人間の心をどれほど  
守るか、ハードな側面からのみでない感性を持ちたい。

東京都 東京都住宅局 渡辺喜代美



「住宅人権の視点から阪神淡路大震災の記録づくり」

- 日本住宅会議『1966年版住宅白書』の取組み -

私が所属する日本住宅会議は、1982  
年に設立され、活動の柱の一つに住宅  
白書の隔年毎の刊行があります。1996  
年版は人権の視点から住宅を見直そう  
と企画されましたが、阪神淡路大震災  
に直面し、「住宅人権」の検証としても震災を取り上  
げる必要があり特集を「阪神淡路大震災」としました。



「白書」ですから実態を浮き彫りにし、問題・課題  
を整理し、解決への方向を探ります。既に住宅・都市  
分野に関して建築学会、都市計画学会、都市住宅学会  
において全国的な実態調査が行われています。これら  
に学びながら、住宅会議としては被災した人々の生活  
とその再建に視線を合わせてまとめていきます。

住宅会議は、教員、行政職員、弁護士、建築家、老  
人ホーム施設長、運動団体等の様々な方が会員、研究  
分野も学際的であり、人間の尊重を損なう震災の被害  
とその後の復興過程が包括的に描かれると思います。  
これらの実態を通し、改めてこれまでの都市・住宅政  
策の検証を行い、この震災を戦後50年の日本の痛恨の  
教訓としてより前進的な方向を出していく意図です。  
神戸での編集委員会の折、被災地域を歩きました。10  
0日以上たった今も、公園にはテントが立ち並び、避  
難所には高齢者を含む多くの人々が生活しています。  
JRで芦屋に近づく頃からは別世界でした。長田区の  
真野を訪れ、まちの復興に向けてのエネルギーに逆に元気  
づけられ、病院から抜け出してきた熊本大の延藤先生  
にお会いし、頭の下がる思いで帰ってきたところです。

東京都 目白学園女子短期大学 中島明子

■広報日より

NO. 11のNEWSLETTERではNO. 10に引き続き、その後の阪神地区の街と地域の人々や  
街づくり計画に参画している会員からの報告「1995阪神・淡路大震災から3ヶ月」  
を特集しました。これからの正念場です。新しい街づくり計画は多くの解決しなけ  
ればならない課題がありまじょうが、東京都の渡辺さんの一文“参加のまちづくり  
は日常的に蓄えられてきた人と人の豊かさが……”にあるこの豊かさを反映した新し  
い街づくりとなるよう期待しています。

UIFA JAPON会員松本千都子さんの連絡先をご存じの方、是非ご一報下さい。